HAGI INTERNATIONAL UNIVERSITY REVIEW, Vol.6, No.1, Nov. 2004

韓・日両言語における音韻添加

―サイッソリ化と連濁・促音化を中心に―

李　文　相

目次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．研究方法および表記方法
Ⅲ．サイッソリ化と連濁・促音化の条件及び機能について
　Ⅲ－1．サイッソリ化の恣意性
　Ⅲ－2．連濁・促音化との対照比較から
　　Ⅲ－2－1　連濁との対比
　　Ⅲ－2－2　促音化との対比
Ⅳ．語頭硬音化と語頭濁音化の対照比較
Ⅴ．おわりに

ABSTRACT

In this paper I will discuss the findings made by contrasting Rendaku, Sokuonkka and Saissori-ka, which are the phenomena found in compound words in both Japanese and Korean. These phonetic phenomena unite two words by making the latter part of a compound word stand out. The lenition of the beginning of a word has been restrained in both Japanese and Korean historically. However, when it is used in Japanese words, it expresses the concept of slang, which interestingly, is done by the phenomena of Saissori-ka in Korean.

Keywords: fortition, lenition, laryngeal, voiced, genitive

Ⅰ．はじめに

韓・日両言語において大きな語彙的特徴になっている「サイッソリ化」[i]と、「連濁」および「促音化」はそれぞれ固有語の複合語に起こる音韻添加現象である。

サイッソリ化とは、韓国語の複合語において前部要素が有声音であるとき、硬音（/－ｔ/→/ʔ/）が添加され、後部要素の「平音」（+obstruent,＋lax）/ｐ,ｔ,ｋ,ｃ,ｓ/ が/pp,tt,kk,cc,ss/

のように硬音化（fortition）していく現象である。前部要素の語末が母音で終わる場合は添加のしるしである‘ㅅ’ ／s ／が挿入される[ii]。

韓国語のサイッソリ化と類似対応する現象が、日本語の「連濁」および「促音化」現象である。連濁とは、語と語の複合が行われる時、後部要素の頭子音（+obstruent）が有声音化（+voiced）の特性を獲得して／k ,s,t,h／→／g ,z,d,b／のように軟音化（lenition）する現象であり、促音化とは、促音「っ」の添加により、後部要素の頭子音（+obstruent）が／k ,s,t,h／→／kk ,ss,tt,pp／のように子音強化を起こす現象である。

ただ、複合語であればいつでも音韻添加が起こるというわけではない。

例えば、韓国語の물고기[iii]/mul－koki/（水＋肉）はサイッソリが添加されて［mul－kkogi］（魚）となるが、불고기/pul－koki/（火＋肉）ではサイッソリ化は現れず［pul－gogi］（焼肉）となる。同様の音韻環境でもこのようにサイッソリが出現する語としない語がある。

日本語においても、例えば［yama－kawa］（山＋川）と［yama－gawa］（山＋川）」とでは意味が異なり、前者は「山と川」を、連濁が現れた後者は「山を流れる川」をさしている。また、例えば「それ+きり」からの構成である［sore－kkiri］と［sore－kiri］、［sore－giri］とではそれぞれ言葉の概念は異なる。

両言語の複合語におけるこれらの音韻添加は、語と語が複合される時に現れ、ある抽象的概念を含意した新たな「一語化」に向かわせる機能がある。

なお、韓・日両言語の複合語内で起こるこれらの音韻添加の音が俗語などの語頭に現れ、「語頭硬音化」と「語頭濁音化」によって直感的且つ感情的表現を担っているものが多い。

本稿のねらいは、両言語のそれぞれの音韻添加の役割や機能を音韻論的・統語論的・意味論的な観点から比較対照し、音韻変化の体系についての構築を試みようとするものである。

Ⅱ．研究方法および表記方法

サイッソリ化の語彙データーとしては、複合語語彙集カードをつくり、このカードをもとに韓国ソウル市在住の母語話者から採録したものを用いた。そして、韓・日両国における関連の文献と両言語それぞれの国語辞書などを参考にして考察を行なった。なお、韓国語のサイッソリ化が主に複合名詞に現れる現象であるので、両言語ともに複合名詞に照準を合わせて考察の対象とした。

また、連濁やサイッソリ化が原則として起こる固有語を主な対象とするが、漢語（漢字語）の場合でも、借用語としての意識が薄れた語彙に関しては考察の対象に含めた。

以下、本稿での韓国語の表記は次の「子音・母音の体系」の表に従い行なった。

短母音体系（9母音）			重母音体系（12母音）				
ㅣ [i]	ㅡ [ɯ]	ㅜ [u]	ㅟ [ui]	ㅢ [ɯi]	ㅠ [yu]		
ㅔ [e]	ㅗ [o]	ㅓ [ə] ㅚ [ö]	ㅞ [ue]	ㅖ [ye]	ㅝ [uə]	ㅕ [yə]	ㅛ [yo]
ㅐ [ɛ]	ㅏ [a]		ㅙ [oɛ]	ㅒ [yɛ]	ㅘ [wa]	ㅑ [ya]	

(19子音)	(牙音)	(舌音)	(唇音)	(歯音)	(喉音)
平音(lax)	ㄱ [k]	ㄷ [t]	ㅂ [p]	ㅅ [s]	ㅈ [c]
硬音(tense)	ㄲ [kk]	ㄸ [tt]	ㅃ [pp]	ㅆ [ss]	ㅉ [cc]
激音(aspirated	ㅋ [kh]	ㅌ [th]	ㅍ [ph]		ㅊ [ch]
喉音 (laryngeal)					ㅎ [h]
流音(liquid)				ㄹ [r／l]	
鼻音(nasal)	ㅇ [ŋ]	ㄴ [n]	ㅁ [m]		

※　韓国語の子音の相関は、平音(lax)／硬音(tense)／激音(aspirated)の３項対立である。

ㅂ／ㅃ／ㅍ　　ㄷ／ㄸ／ㅌ　　ㅅ／ㅆ　　ㅈ／ㅉ／ㅊ　　ㄱ／ㄲ／ㅋ

p／pp／ph　　t／tt／th　　s／ss　　c／cc／ch　　k／kk ／kh

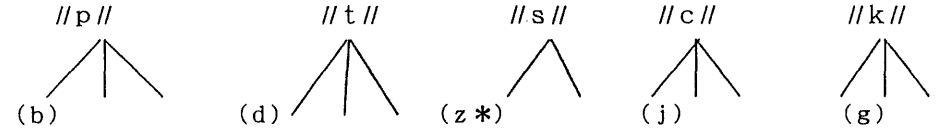
※　但し、本稿での平音／硬音／激音の表記は、便宜上、次の記号によって記すことにする。

p／pp／ph →p／p'／p"　　t／tt／th →t／t'／t"　　s／ss →s／s'

c／cc／ch →c／c'／c"　　k／kk ／kh →k／k'／k"

次は、韓国語と日本語の形態音素交替である。

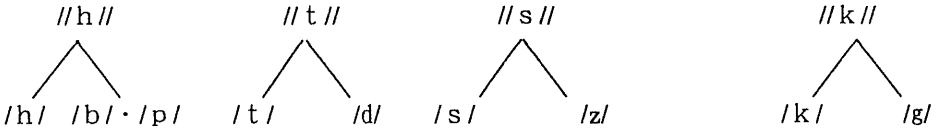
＜韓国語の形態音素交替＞



/p/　/p'/　/p"/　/t/　/t'/　/t"/　/s/　/s'/　/c/　/c'//c"/　/k/　/k'//k"/

〔(z＊) は現代韓国語には存在しない。(　) 内は、同化現象として起こる有声音化である。〕

＜日本語の形態音素交替＞



※　日本語の子音の相関は、清音／濁音の２項対立である。

※　本稿では、韓国語の発音表記の際、[　　]を用いずに記すこともある。

Ⅲ．サイッソリ化と連濁・促音化の条件及び機能について

次は、サイッソリ・連濁および促音化の一例である。

サイッソリ化現象	連濁現象	促音化現象
[sanp'ul]</san/+/pul/	[koibito]</ koi/+/hito/	[sitappara]</sita/+/hara/
（山火事）	（恋人）	（下っ腹）
[multʼanji]</mul/+/tanci	[isidai]</isi/+/tai/	[kimottama]</kimo/+/tama/
（水瓶）	（石鯛）	（肝っ玉）

以下、本章ではそれぞれの音韻現象が現れる条件および機能等について考察する。

Ⅲ－1. サイッソリ化の恣意性

まず、韓国語の複合語に現れる音韻現象を示す。

	（前部要素の語末A）	（後部要素の頭子音B）	（複合語後部の頭子音の音声実現C・B´）
（イ）	/V, -m, -n, -ŋ, -l/+/k, t, p, s, c/→	[k´], [t´], [p´], [s´], [c´]	
（ロ）	/V, -m, -n, -ŋ, -l/+ /k, t, p, (s), c/ →	[g], [d], [b], ([z*]), [j]	
（ハ）	/-k, -t, -p, -s, -c/+/k, t, p, s, c/→	[k´], [t´], [p´], [s´], [c´]	

※　Vは母音、Aは前部要素の語末、Bは後部要素の頭子音。C・B´は複合後の後部要素の頭子音を表す。現代韓国語に［z］音は存在しない。

※　以下、文中では前部要素をA、後部要素をBと記す。

上の表でわかるように、韓国語の複合語では、有声音の環境でサイッソリ化（イ）と有声音化（ロ）が起こり、阻害音つづきの環境では硬音化（ハ）が起きる。〔（ロ）と（ハ）は韓国語では普遍的な音韻現象で特異なものではない。〕

本稿での考察の対象は、上の（イ）と（ロ）である。ここで問題となるのは、同じ音韻環境の複合語であっても、有声音の環境でBの頭子音の平音（+obstruent 、+lax）にサイッソリ化が起こったり、起こらなかったりすることである。その原因究明には形態素境界や音韻論だけでは解決が難しいので意味論や統語論を動員させ、さらには語彙的特性等をも考慮しなければならない。

以下にサイッソリ化の恣意性についてみていく。

次の例は、はじめに取り上げたユ刀/koki/関連の複合語である。

（1）①/koki/［-gogi］：牛肉 s o -、豚肉 t o ε ji -、生肉 nal -、焼肉（火＋肉）pul -
　　②/koki/［-k´ogi］：魚 mul -、淡水魚 min mul -、海魚 pada -、川魚 ka ŋ -

一般的な概念として/koki/［-gogi］といえば肉類をさし、/koki/［-k´ogi］のようにサイッソリ化が起これば魚類をさしている。ただ、/koki/がAにくると、「語頭に濁音がこない」とい

う古来からの頭音制約により発音の違いはなくなる。〔고깃집[kogi - c'ip]（肉屋）：고깃배[kogi - p' ε]（漁船）〕

ここでは、Aの成分が有生物（+animate）や、形容する語彙、方法や手段を表す語彙がくる場合は通常サイッソリ化が起きないが、②のようにAが場所をさす場合はサイッソリが起きることに注目したい。

次に、サイッソリ化により抽象的な概念が加えられて一語化に向かう例をみてみよう。

（2） ①/cari/［－jari］：社長の席 s aja ŋ -、端っこ kaja ŋ -、わが場所 je -、
歯の跡 ip'al -

②/cari/［－c'ari］：社長の地位 s aja ŋ－、職業 il－、酒宴 sul－、官職 pyəsɯl－、
寝床 cam－

（2）のBに当たる/cari/の意味は「ある事物や人間が占める場所」である。①の場合、各語の/cari/はそれぞれ具象性があり本義に基づいている。しかしサイッソリが添加される②の場合は、場所という具象性から離れ、それぞれに地位なり、仕事なり、権威なりの抽象的な概念が加わる。例えば、［s aja ŋ - jari］といえば、社長の席そのものを意味するが、サイッソリが添加された［s aja ŋ - c'ari］といえば、社長としての権威的な概念を意味することとなる。時代劇などでよく耳にする［pyəsɯl - c'ari］（官職）なども同様である。また、/s ul/（酒）＋/- c ari/（場所）構成の［sul - c'ari］　といえば、サイッソリの添加により語意の中心が場所という具象性から「宴の中身」といった非具象性の方に移り、一語化する。

/cam/（眠り）＋/cari/（場所）の複合語の［cam - c'ari］は、寝床そのものをさすが、睡眠時の心身の状況をも含意する概念が含まれる。cam - c'ari-ga puranhada（眠りにつく心の様子が不安である）とか、cam - c'ariga pyənanhada(寝る時の心の様子が安らかである)などのように、寝床という具象性に心の様子を表す非具象性までが含まれる。

次に、/pap/（飯）の構成例からサイッソリ化をみてみよう。

（3） ①/pap/［- b ap］：豆飯 k "oŋ -、米飯 s'al -、麦飯 por -、赤子のご飯 agi -、
犬の餌 k ε -、虎の餌 horaŋi -、焼き飯 pok'шm -

②/pap/［- p'ap］：朝飯 ac"im -、昼飯 jəmsim -、目走り飯 nuc"i -、ただ飯 k oŋ -、
祭祀 cesa -、使者飯（喪家関連用語）saja -、海苔まき kim -、
混ぜご飯 pibim -

上の①の非サイッソリ化は、材料や有生物＋/pap/（ご飯）の構成であり、語意全体ではBの/pap/（飯）に重点がおかれる。それに比べ、②のサイッソリ化の場合、非具象性＋/pap/（ご飯）の構成となり、語彙全体ではAに重点がおかれる。また、時制＋/pap/（ご飯）の複合語には必ずサイッソリ化が現れることにも注目すべき点である。

ここで、（3）の①②の下線部分について考えてみる。

	（海苔巻き飯）	（混ぜご飯）	（焼き飯）
（従来）	[kim - bap]	[pibim - bap]	[pok'шm - bap]
	↓	↓	
（現在）	[kim - p'ap]	[pibim - p'ap]	[pok'шm - bap]

[kim - p'ap]（海苔巻き飯）と　[pibim - p'ap]（混ぜご飯）は近年サイッソリ化し、今はほぼ定着している。従来の国語辞書には[- b ap]のままのものもあるが、新しい辞書では既に

[-p'ap]に入れ代わっているものがほとんどである。次に、サイッソリ化が起こっていない①の［pok'ɯm-bap］（焼き飯）との比較で考えてみたい。音韻的にも語構成（派生形名詞＋名詞）においても［pibim-p'ap］と同じ条件であるが、［pok'ɯm-bap］（焼き飯）は従来の非サイッソリ化のままである。この２つの複合語の差異を平たく言えば、近年、これらのメニューに対する大衆の人気ぶりの差が窺えるということである。私は、使われる頻度数に比例してサイッソリ化が起こるという仮説を立ててみたい。その理由は、サイッソリ化は硬音特有の聴覚に響く効果が期待できるからである。この仮定に立脚すれば、サイッソリ化の単純図式が考えられる。即ち：頻度数の増加→サイッソリ化（効果的な伝達）

ところで、今、日本でも人気のビビンバ-［pibim-ba］（混ぜご飯）は、従来の［pibim-bap］からの借用語である。韓国ではサイッソリ化の影響で従来の［pibim-bap］と新着の［pibim-p'ap］が入り乱れて混乱しているが、日本ではさて、どうなるであろうか？　韓国同様にパーに統合されるか、それとも日本語に慣れ親しんで連濁の範疇に入るのであろうか、興味深い。

なお、［pibim-p'ap］（混ぜご飯）と歩調を合わせてサイッソリ化を起こし、定着したのが［kim-p'ap］（海苔巻きご飯）である。［kim-bap］→［kim-p'ap］への要因は、［pibim-p'ap］（混ぜご飯）と歩調を合わせた類推変化の結果とみることもできるが、私はやはり、使用頻度数が大きく増えてきたことに因るものではないかと思っている。

次は、語彙特性との関連でサイッソリ化が生じる例である。

(4) ①/ton/（金）：-p'yərak（成金）、-p'əri（-儲け）、-c'igap（-財布）、
-p'aŋsək（-座布団）
②/son/（手）：-c'aŋnan（-遊び）、-k'abaŋ（-カバン）、-c'əul（-秤）、
-c'imjak(-加減)

/ton/（金）や/son/などのように、語内部の深層にサイッソリ化を誘発する特性のある語と複合されると、語彙特性が潜在的に働き、後部にくる語彙を無条件にサイッソリ化してしまう語がある。つまり、語彙特性ともいえるものがサイッソリ化の要因として働くのである。

次の（5）は、(4) のAの部分に当たる/ton/（金）と/son/（手）の代わりに別の語彙を入れ替えてみたものである。

(5) ①-p'yərak（金＋雷→成金）：mul-byərak(水-)、pul-byərak（火-）、
san-byərak(山-)
②-c'aŋnan（手＋遊び）：mal-jaŋnan（言葉-）、mul-jaŋnan（水-）、
pul-jaŋnan（火-）

この場合は、サイッソリ化は起こらない。上での語の置き換えにより窺えるサイッソリ化の要因は、多数への類推変化や語彙的特性といったものも機能しているということである。

次は、非サイッソリ化の語構成をあげてみよう。

(6) koin-dol（支え石）、kənnən-baŋ（向こう部屋）、can-don（小銭）、
pin-jip（空き家）、tan-bi（甘雨）、curin-bε（空きっ腹）、kan-bam(昨夜)

上の用例は、Aが用言の冠形詞形（連体形）(/-n/) でBには一般名詞が加わってできた複合語である。この場合はサイッソリ化は起こらない。この非サイッソリ化の原因は、この構成の複合語が一語として定着していながらも２語意識が残ることにあると思われる。

次に、別の要因で起こるサイッソリ化をみてみよう。

(7) -k'am（-の材）、-k'aru（-の粉）、-k'əri（-の種、ねた）、-k'yəl（-の木目）、
-p'aram（-の勢い）、-k'ap（-の値段）、-k'iun（-気配）、-t'əmi（-の山）など

これらは、自立語でありながら複合語のBに現れることが多く、常にサイッソリ化とともに現れる語彙である。習慣性という面からも注目したい。

例えば、上の例から下線の-k'əri（-の種、ねた）をとりあげ、サイッソリ化していく様子をみる。即ち：-k'əri（-の種、ねた）

(8) komin-k'əri（悩みのの種）、koansim-k'əri（関心事）、kugyəŋ-k'əri（見物もの）、
iyagi-k'əri（話の種）、c"an-k'əri（おかずの種）、kisa-k'əri「記事」のねた

これらの語は、B に－k'əri（－の種、ねた）が組まれるとサイッソリ化することがわかる。

サイッソリ化にはさまざまな要因が関わっており、その条件や機能について一言で説明することは難しい。しかし、ある規則的な動きを整理すると次のようになろう。

(9)

「サイッソリの添加」	「サイッソリの非添加」
・ AはBの場所・時制を示す	・ABが並立または対立
・ 意味の抽象的概念	・Aが（＋有生）、意味の本義
・ 属格的関係、用途	・AがBの手段・方法・材料・形容
・ 慣用度の深化、類推	・新作複合語
・ 語彙的特性（＋サイッソリ性）	・語彙的特性（－サイッソリ性）

Ⅲ－2. 連濁・促音化との対照比較から

サイッソリ化は硬音特有の「発音の明瞭さ」により、連濁は有声音による「発音負担の軽減」により、また促音化は促音の挿入によって生じた子音強化により、それぞれ抽象的な概念が加わり新たな一語化を目指す。音韻添加にはそれぞれ様々な要因が潜在的に関わっている場合が多い。例えば、韓国語で/sajaŋ-cari/（社長＋席）は［sajaŋ-jari］と［sajaŋ-c´ari］とで

は語感が異なり、前者が「社長の席」を、後者は「社長の地位」を意味する。日本語でも/otoko-huri/（男＋ふり）は/otoko- buri/ と/otoko- ppuri/（男＋ぷり）とでは語感が異なり、前者が男の容姿などの外見的な面を表すのに対して、後者は何となく太っ腹で大胆な男の性格の方に重点が置かれる。概して、韓・日両言語の複合語におけるそれぞれの音韻添加は、抽象的概念を含意させて新たな一語化に融合させる機能があるように思われる。

ここでは、前節でみてきたサイッソリ化の考察をもとに、日本語の連濁および促音化の条件や機能などについて対照比較しながら考察を続けたい。

まず、サイッソリ化・連濁・促音化の具体例を以下に示す。

（10）

サイッソリ化現象	連濁現象	促音化現象
[sanp'ul]</san/+/pul/	[koibito]<| koi/+/hito/	[sitappara]</sita/+/hara/
（山火事）	（恋人）	（下っ腹）
[mult'anji]</mul/+/tanci/	[isidai]<isi/+/tai/	[kimottama]</kimo/+/tama/
（水瓶）	（石鯛）	（肝っ玉）
[kaŋk'ogi]</kaŋ/+/koki/	[kogara]</ko/+/kara/	[karakkisi]<| kara/+/kisi/
（川魚）	（小柄）	（からっきし）
[sans' ε] </san/+/s ε /	[aozora]</ao/+/sora/	[massara]<| ma/+/sara/
（山鳥）	（青空）	（まっさら）
[pamc'am]</pam/+/cam/	[koduti]<| ko/+/tuti/	[yokottura]<| yoko/+/tura/
（夜寝）	（小槌）	（横っ面）

上の用例から、韓・日両言語の音韻添加では次の音韻規則が導き出される。

（11）　＜サイッソリ化＞　（Nは名詞、Cは複合語の表示である。）

$$[+\text{obstruent}, +\text{lax}] \rightarrow [+\text{tense}] \;/\; \overset{N}{[+\text{son}]} \quad \overset{C}{\overset{N}{[\underline{\quad}]}}$$

＜連濁化＞

$$[+\text{obstruent}] \rightarrow [+\text{voiced}] \;/\; \overset{N}{[+\text{voiced}]} \quad \overset{C}{\overset{N}{[\underline{\quad}]}}$$

サイッソリ化と促音化の子音強化過程の比較

바닷가（海辺）（φは形態素境界、>は内破音のしるし）

／pataφka／→pata-s-ka→ [pata ʔ >ka] →[pa d akka]

裏っ側

／uraφkawa／→ura-っ-kawa→ [ura ʔ >kawa] → [urakkawa]

（11）にあげた音韻規則から、音韻添加を分析すると有声音化が無標（unmarked）である韓国語では異化現象とも言えるサイッソリ化（fortition）によって、有声音化が有標（marked）である日本語では、一方では連濁（lenition）によって、他方では促音化によって［＋tense］：[+voiced]の音韻が複合語における弁別性や意味分化の機能を担っている。

Ⅲ－2－1　連濁との対比

サイッソリ化と連濁の音韻比較において、社会的言語的特徴をよく反映しているといわれる擬声・擬態語が、子音においてどのように現れるかを観察してみよう。（<は表現効果の弱強）

（12） 韓国語	日本語
banjak-banjak<p'an'cak-p'anc'ak	きらきら<ぎらぎら
dalg rak- dalg rak < t'alg rak- t'alg rak	かたかた<がたがた
bɛŋ gɯl- bɛŋ gɯl<p'ɛŋ gɯl-p'ɛŋ gɯl	くるくる<ぐるぐる
gəndɯl- gəndɯl<k'əndɯl- k'əndɯl	ふらふら<ぶらぶら

擬声･擬態語の場合、韓国語ではサイッソリ化の硬音が、日本語では濁音が表現強化の機能を果たしているように見受けられる。（韓国語では、さらに陽母音<陰母音が表現強化機能を担う。）

（13）サイッソリ化（9）と連濁との意味的機能の対比の例

◆　ＡＢが並列・対立構造では両現象は共に起きない：夜昼、山川、草木、谷川、親子、上下

◆　ＡがＢの時制や場所を指すとき両現象が起きる：外面、山桜、野菊、海亀、朝風呂、冬鳥

◆　Ａが描写・材料・手段の時、連濁は起き易い：金槌、猫舌、肉汁、石橋、火バサミ、肉包丁

◆　ＡＢが全体と部分の関係にある時連濁は起きやすい：枝毛、歌声、目尻、目頭、腋毛、

◆　人を指す場合連濁は起きにくい：犬殺し、人さらい、書き手、絵描き、犬飼（－人、－侍）

◆　人意外の有生は連濁し易い：あぶらぜみ、牛ガエル、毒ぐも、穴ぐま、熊ん蜂、毛がに

◆　多数への類推による場合：入りくち（もとの発音）：出ぐち・門ぐち・戸ぐち→いりぐち、

◆　語彙的特性から常に非連濁の語彙がある：－さき（先）、－ひも（紐）、－こな（粉）

サイッソリ化を連濁に対比させると大体次のようにまとめられる。

（14） 「連濁」の傾向	「非連濁」の傾向
・　ＡがＢの場所・時制を示す	・ＡＢが並立または対立

・ ＋有生（人以外）	・人を指す場合起き難い
・ AがBの手段・方法・材料	・ 新作複合語
・ 全体:部分（属格的関係）	・ 用途、形容
・ 慣用度の深化（語彙的特性）	・ 語彙的特性

次は、韓・日両言語の固有語／和語および漢字語／漢語のサイッソリ化と連濁の例[iv]である。それぞれB(後部要素)の頭子音の音韻変化の有無に注目したい。

(15)　　＜連濁現象＞　　＜サイッソリ化現象＞

Bが和語	Bが非和語	Bが固有語	Bが非固有語
hiyazake	rei{s/*z}yu	tɯl-c'imsɯŋ	ya{s/*s'}u
(冷酒)	(冷酒)	(野獣)	(野獣)
amagasa	ama{g/*k}appa	kaŋ-k'a	kaŋ{b/*p'}yən
(雨傘)	(雨合羽)	(江辺)	(江辺)

上でわかるように、韓・日両言語ともに漢字語／漢語はサイッソリ化や連濁は生じない。

※韓国語の漢字構成語で［l］（＋coronal）＋［－t，－s，－c、］の環境で無条件にサイッソリ化する漢語〔[kal t'ɯŋ]（葛藤)、[bal s'a]（発射)、[kyəl c'əŋ]（決定）など〕や、歴史的経緯から従来の日本語の残滓ともいわれる、理由なきサイッソリ化の語彙〔－課、－科、－件（例外：物件)、－法など〕は本稿では対象としない。

漢語やそのほかの外来の借用語も長期間固有語と慣れ親しみ、それぞれの単語として確立してくると、連濁やサイッソリ化の範疇に入ることが可能となる。

ama{g/*k}appa(雨合羽)	son-{k*/k'}abaŋ（手持ちカバン）

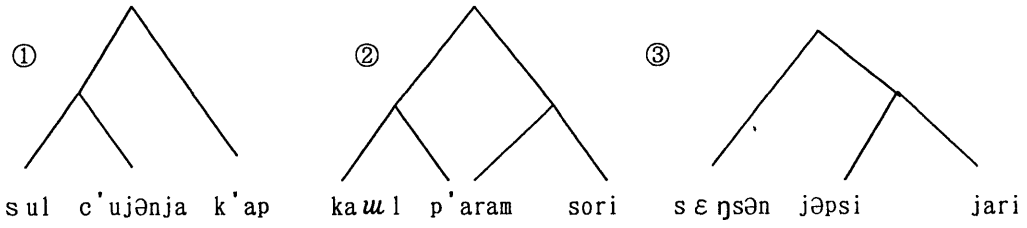
次は、「ライマンの法則」が韓国語のサイッソリ化に適用するかどうかについてである。

次の（16）は、これの実験用に組み合わせた3語からなる複合語である。

韓国語の3語からなる複合語の枝分かれ構造を考察することにする。

(16) 酒（用の）やかんの代金　　秋風の音　　さかな皿の置き場所

[[sul+c'ujənja] k'ap]　[[kaɯl+p'aram] sori]　[sεŋsən [jəpsi＋jari]]



この内部構造を観察すると、②に当たるものが多い。つまり、一度、前の要素にサイッソリ化が適用されると、その後部では音韻添加は起こらない。サイッソリ化の機能が、ある要素を引き立たせ融合させるという立場に立って考えるなら、語ごとにサイッソリ化が起こるとどの語をより目立たせようとするのかわからなくなり、焦点が曖昧になってしまう。複合語における音韻添加の意味がなくなってしまうからである。

ただ、①は、第2要素にも第3要素にもサイッソリ化が起こっている。これについてはどう判断すべきであろうか。

①の語構成を観察してみると、第3要素の語彙の／ kap s ／［kap］は、ほかのいかなる語彙との構成でも必ず、サイッソリ化を誘発する特性の強い語である。そのため、第2要素にも第3要素にもサイッソリ化を許容したという解釈が成り立つのではないかと考える。

さらに（16）②の［[kaɯl+p'aram] sori］（秋風の音）の内部構造をみてみよう。

この複合語を二つの構成要素からなる二つの部分に分類してみると、音韻添加の移動の様子が見えてくる。即ち：[[kaɯl+p'aram] sori]（秋風の音）は、

[[kaɯl] p'aram]（秋風）＋ [[param] s'ori]（風の音）

→ [[kaɯl] p'aram] ＋ [[param] s'ori]

↓

[kaɯl + p'aram] sori]（秋風の音）

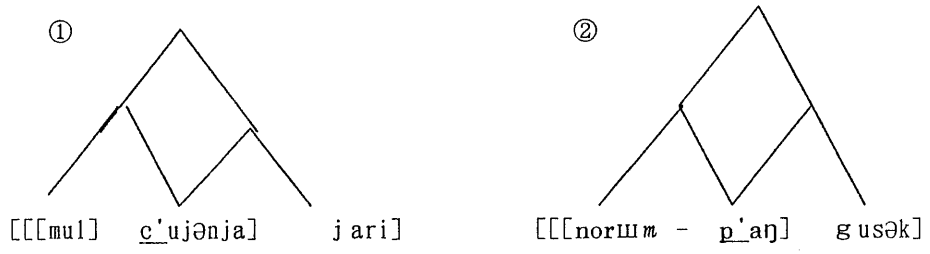
同様に別の例でみてみる。

① [[mul] c'ujəɲja]（水用のやかん）＋ [[cujəɲja] c'ari]（やかんの置き場所）

→ [[[mul] c'ujəɲja] j ari]（水用やかんの置き場所）

② [[norɯm-p'aŋ]（博打部屋）＋ [[paŋ-k'usək（部屋の隅）

→ [[[norɯm-p'aŋ] g usək]（博打部屋の隅）



さらに、ほかの構成語を使って、サイッソリ化の移動をみたものである。

（17）① [[pada] p'aram]（海風）＋ [[param] s'ori]（風の音）

→ [[[pada - p'aram] sori]（海風の音）

② [[s ɛ ŋ s əɲ-k'age]（魚屋）＋ [[kage c'ari]（店の場所）

→ [[[s ɛ ŋ s əɲ-k'age] j ari]（魚屋の場所）

③ [[kənnə-p'aŋ]（向かい部屋）＋ [[paŋ-c'ɯin]（部屋の主）

→ [[[kənnə-p'aŋ] jɯin]（向かい部屋の主）

3語からなる複合語を用いた上の用例では、一旦、前の要素にサイッソリが適用されると、その後では現れにくいことが確認できるであろう。つまり、サイッソリ化の機能は、ある要素を引き立たせることによって新たな概念を付加し、融合させそれらの一語化を図ることにある。この構図からは、語彙特性を持つ語彙でない限り連濁におけるライマンの法則がある程度サイッソリ化にも適用できるとの仮説が成立しよう。

Ⅲ－2－2　促音化との対比

促音は歴史的にも「つめる音」あるいは「つまる音」ともいわれ[v]、促音の「っ」の仮名はそれだけを単独に声に出して読むことができない唯一の仮名である。歴史的仮名遣いでは「つ」の仮名を当て、現代仮名遣いでは小さな「っ」で表記している。語中の無声音間に促音が挿入されると、直後の無声音と同じ調音の態勢で閉鎖、または持続の結果（[－t] → ʔ）として促音化が生じる。

一方、韓国語でも複合語のAが母音である場合はBとの間に「ㅅ」(→ [－t]) が挿入され[vi]、直後の無声音と同じ調音の態勢で喉頭の閉鎖、または持続の結果（[－t] → ʔ）としてサイッソリ化が生じる。

ここでは、促音化の機能が連濁とは意味分担をしながら現れ、共に韓国語のサイッソリに対応していることに着目し、連濁と促音化がペアになって現れる複合語を重点的にみてみる。

（18）ア　「ありっ丈：あるだけ」、「裏っかわ：うらがわ」、「うわっぱり：*うわばり」、「川っぷち：川ぶち」、「川っぺり：かわべり」、「首ったけ：首たけ：(*首だけ)」、「すけっと：すけびと」、「それっきり：それぎり」、「寝たっきり：寝たきり：ねたぎり」、「でっぱ（出っ歯）：でば（出刃）」、「長っ話：長ばなし」、「ぬすっと：ぬすびと」、「飲みっぷり：のみぶり」、「話っぷり：話ぶり」、「太っっぱら（腹）：太ばら（腹）」「負けっぷり：　*まけぶり」、「脹れっ面：ふくれづら」、「嫁っこ：*よめご」、「あっぱれ：あわれ」

イ　「赤っぱじ：赤はじ」、「開けっぴろげ：開け広げ」、(*からっ騒ぎ)、からっかぜ、皮っかぶり、素っぱだか、つるっぱげ、「横っぱげ：横はげ」、「横っとび：横とび」、ぶっかじり、よっぽど、蹴っとばし、とっぱずれ、ひとっとび、食いっぱぐれ

上の各用例からは、当初は同意だった語彙に連濁や促音化による形態変化が起こると、意味変化を起こして新たな一語化へと進んで定着する複合語の様子が窺える。

例えば、「それ＋きり」からつくられる①「それきり」：②「それぎり」：③「それっきり」ではそれぞれの語感から受ける意味の深さや思い浮かぶ様子が一様でない。原型を保っている①は

普通淡々とした様子を、②はそれでもうおしまい、終わり、という静止状態を、③の促音化では、①の意味がさらに強化され、例えば、愛想をつかしてふいっと帰ってしまって、もう二度と現れない様相が想像できる。また、「崖ぶち」:「崖っぷち」では、前者は、単なる崖の淵を想像するのに対し、後者では、もう後がないという危ない概念が付加され、さらに強調されている。

男ぶり：オトコップリではどうであろうか。意味分担において前者は男の器量のよさや、姿かたちなどの「静」的な方を、後者はすることが男らしく、そこには気前のよさであるとか、異性を意識した男の「動」的な部分が含意される。のみぶり：飲みっぷりでも同様に、前者は静かに飲む姿や形を、後者は大仰な、ぐいぐいと飲み干している気前のよさに重点がおかれる。でば：デッパの場合、そもそも同意だったこの2語は、意味変化を起こし、現代語では前者は包丁や刃物などを、後者は前に突き出た歯を現すそれぞれ別の複合語として定着した。

泥棒をさす中世の言い方で：ぬすびと：ぬすっと、があるが、前者は大きな盗みをする集団で動く中世の犯罪人的なイメージが、後者は、なんとなく小さなものをチョコマカとかすみ取るイメージがあり、狂暴性からは距離がありそうである。

太ばら（腹）：太っぱら（腹）では、前者は腹が膨らんで下に垂れている肉体的な腹の格好を思い浮かべる反面、後者は肥えて太った腹を意味しているだけではなく、度量が大きく大胆な性格の方にどちらかというと重点がおかれており、意味を担う範囲が違うようである。また、すけっとといえば、正式に助ける役割よりもいつでもさっと出てきて手助けしてくれる、親しみのこもった意味合いが窺える。

上のイの用例は、複合語のBの語中に濁音が含まれている場合である。それらの例は、語と語が複合されるとき濁音の連続を嫌うという日本語の制約(「ライマンの法則」)が働いた結果、連濁の代替機能として促音化が現れたとも考えられる語彙をとりあげたものである。

次に、促音化の性能を知る上で有効な擬態語などから転じた副詞の例に目を向けてみよう。

(19) ウットリ／うとうと、ギッシリ／ぎしぎし、キッチリ／きちきち、コッソリ／こそこそ、サッパリ／さばさば、シットリ／しとしと、ジックリ／じりじり、ハッキリ／はきはき、ブッツリ／ぶつぶつ、ベッタリ／べたべた、メッキリ／めきめき、
（サッキ／さき、とっても／とても、ヤッパリ／やはり）

上の用例は、擬声･擬態語的な要素を内包しながら現れるため、感覚的な表現を強化するのに合っている。括弧入りで示した副詞は、原形との対応から生まれた促音挿入例の副詞であり、促音化によって意味が強化されていることがわかる。

促音化は連濁がライマンの法則の制約に触れる場合には大体、擬声・擬態語的要素とともに現れ、強化機能を担うため語感がより直感的に響く。

次の、接頭辞とともに現れる促音化の例 (20) とサイッソリ化の例 (21) を比較してみたい。

(20) まっか、まっさお、まっくら、まっさかさま、まっしぐら、まんなか、まっぴら、まっぴるま、まんまる、まんみどり、ひっかく、ひんにぎる、ひんぬく、ひんまがる、ひんむく、ぶっこわす、ぶったぎる、ぶったまげる、ぶっとばす、ぶんなぐる、ぶんのめす、とっちめる

(21) sε–p'algan（真っ赤な）、sε–k'aman（真っ黒い）、sεn–nran（真黄）、 ji-k'ut'a（意地悪い） ji-p'alt'a（踏みつける）、jin-nurɯda（押さえつける）、jin- mθkt"a（やたら食べること）

上の例で気づくように、色彩、時間、形態を強化するとき、接頭辞としての「真 - 」、「取 - 」、「打 - 」、「引 - 」との組み合わせがあると、促音化が起こりやすい。また、促音化との相関の中で撥音化が現れることもサイッソリ化と類似している点で興味深い。

一方、韓国語においても色彩や形態の強化を表す際、接頭辞の[sεt-]:[sεn]（真-）、[cit]:[cin]（打っ-）などがサイッソリを伴って直感的な強化を担っている。

雅俗の概念からすると、促音化は俗っぽい言い方に結び付けられる。一方、韓国語のサイッソリ化にも類似対応するものがあり、近年では社会的にその増加が心配されるほどである。

促音化した言い方は、自分の感情をあらわに表現する。そして、どちらかというと文体上には現れ得ない口語的な言い方に近い形となるようである。ここに記された促音化に対する雅俗の概念は、次の章で述べる韓国語の語頭硬音化の語感にも対応するものであり、両国言語の比較が有意義的であるといえよう。

Ⅳ. 語頭硬音化と語頭濁音化の対照比較

次は、語頭硬音化・語頭濁音化の例である。

(22)

語頭硬音化	語頭濁音化
/koŋ - ca/→ [k'oŋ c'a]	buti・buri・ bari -
（無銭の物）	（とても、すごく）
/sεŋ– kocip/→ [s'εŋ gojip]	do-aho、do-keti、do-sirouto
（要らぬ意地）	（ど - 付きの強調表現）

古代より日韓両語の固有語に共通の頭音規則がある。まず、一つに語頭に濁音が来ないこと、そしていま一つは、語頭に流音（r）が来ないということである。ここでの関心は、日韓両言語の複合語内で現れるサイッソリ（硬音化）と連濁が近年、日本語では語頭濁音化が、韓国語では語頭硬音化が増え続けていることである。近年増加しつつある語頭濁音化を次に示す。

(23) がにまた、がら空き、ぎっちょ、ぐうたら、ごね得、ごりおし、ざま、ずぶぬれ、だまし討ち、だらしない、でっちり、でぶ、ど-あほ（-いなか、-ぎつい、-けち、-根性、-でかい、-忘れ)、どか雪、どた-ばた（-キャン、-ぐつ)、どら-ごえ（-息子、-ねこ)、どん底、どんちゃん騒ぎ、ばら-銭、ばら肉、ぶす、べた-ぼめ(-ぼれ)、ぼけ、ぼた山、ばて気味、びり、ぶち、ばち、ぶり、ばっかりたべ[1]、

上にあげた語頭濁音語は、清・濁音の相関の対立をなす構成〔カニ（蟹）／がにまた、さま（様）／ざま、はら（腹）：ばら)〕や、擬声・擬態語的な語感が内包されており、直感的な表現になっている。

次に、韓国語の語頭硬音化の例をあげてみる。

(24) [k'-]：[k'oŋ-c'a]（無料)、[k'oŋ-p'ap]（ただ飯)、[k'o-mul]（ガラクタ）

[t'-]：[t'an-sori]（とんでもない言)、[t'e-gəji]（意地っ張り)、[t'uŋ-t'anji]（愚鈍）

[s'-]：[s'ɛŋ-gojip]（言いがかり)、[s'ɛŋ-məri]（生まれながらの髪)、[s'e-ryən]（洗練）

[p'-]：[p'əgida]（威張る)、[p'ɛŋsoni]（脱走、逃げること)、[p'ən-jil-nage]（足繁く）

[c'o-da]：（了見の狭い人）[c'alida]（首になる)、[c'okɯm]（少し)、[c'ok]（顔）

語頭硬音化の語彙を意味別にみると、大体、人間の姿や性格・行動や当時代の話題・卑下の対象に向けられたものが多い。

奈良時代の固有の日本語には、擬音語を除いて語頭濁音語はほとんどなく、現代日本語での「ばら」(薔薇)、「だく」(抱く)、「どこ」(何処）は、本来「いばら」、「いだく」、「いづこ」の“い”が脱落した結果である。これらは、「餓鬼」「波羅門」などのサンスクリット語や漢語や外来語などの語頭濁音の普及によって日本語にも語頭濁音化が次第に広まったものである。

韓国語の語頭硬音化の由来は諸説あるが、前後部の語中で起きたサイッソリが語頭に子音群を生じ、それがきっかけで語頭硬音化へとつながったものである。

語頭濁音化の多くは擬声・擬態語的な要素が内包されており、直感的な俗っぽさにつながっている。語頭硬音化の多くは人間性や当代の話題性の語彙に向けられており、共に直感的な表現を受け持ちながらも洗練されていない俗っぽさを強調・卑下した感覚などをストレートに表している。

---

[1]食事をするとき、同じ種類ばかりを食べることをさす新語

V．おわりに

本稿では、韓国語の複合語における「サイッソリ化」現象を、日本語の複合語における「連濁」・「促音化」現象と対比させる方法で両言語の音韻比較を試みた。連濁は有声音化の発音負担の軽減により、複合語の前部要素と後部要素の融合や意味の抽象的概念を表し、促音化は聴覚的な刺激により複合語の前後部要素の融合や意味の強化、抽象的概念などを直感的に伝える部分がある。両現象はその導出過程や機能、雅俗の概念等において補い合うようにしながらサイッソリ化と対応・類似していることが実感できた。

また、促音化は、連濁の機能にさらなる感覚的強化を加える場合や、連濁がライマンの規則の制約に触れる際はすかさず現れて助っ人役を勤める。聴覚機能を刺激する音感を共有する促音化とサイッソリ化は、自己主張を直感のままストレートに表現することを好む現代社会人の感覚に対応するかのように増加気味である。

サイッソリの機能を確かめるため3語からなる任意の複合語を組み合わせ、サイッソリの移動を観察した。一度サイッソりが起こると、その後部ではサイッソリ化が制約される傾向が認められた。

また、日・韓両言語において古来から制約されてきた語頭濁音は、それぞれ、日本語では「語頭濁音化」が、韓国語では「語頭硬音化」が増え、親近感や蔑視感を直感的に伝えており、興味深い。

今後、アクセントを含めた地域の方言性をも視野に入れながら引き続き、サイッソリ化と連濁・促音化、さらに「語頭硬音化」と「語頭濁音化」の対照比較を行いたい。

注

---

i 韓国では一般的に、複合語の前部要素と後部要素の間に生じる音であることから、「サイ（間）＋ソリ（音）」からなる「サイッソリ」という名称で呼ばれている。本稿では、サイッソリに変わる現象であるゆえ、便宜上「サイッソリ化」と記すことにした。

ii 韓国語の音韻現象において‘ㅅ’／s ／は語末位置では不破音（un plosive）の［－t］との弁別性が中和されるため、後続する無声音は硬音化される。

iii 中世韓国語の場合、/mul-koki/はサイッソリが挿入された/mus-koki/のように現れる。
iv 一部、窪薗晴夫・大田聡（1998）『音韻構造とアクセント』研究社 pp. 126 参照

v 本居宣長の「漢字三音考」には促音便について「・・・凡テ急促(ツマ)ル聲ハ。殊ニイヤシキ故ニ。古言ハサラニモイハズ。中古マデモ雅言ニハ是レアルヿナシ。故ニ今トテモ歌書ナドヲ読ニハ。コレヲマジフルヿナシ。此音便ハタヾ漢籍ヨミト。俗語トニノミ多クシテ。俗語ニハ力(チカラ)ヲ入レテ云フ言ニハ。眞白(マシロ)ヲマッシロ。眞更(マサラ)ヲマッサラ。唯(タヾ)ヲタッタ。毎(イツモ)ヲイッツモト云類モツ子ニ多シ。・・・」と記されている。（『国語学体系』第四巻）

vi ハングル正書法第30項（『한글맞춤법（ハングル正書法）講義』新丘文化社）より抜粋翻訳）

‘サイシオッ‘ㅅ’は次のような場合に添加する。

1．　固有語からなる合成語（本稿では複合語と呼ぶ）で、先行語が母音で終わる場合

（1）後部要素の初声が硬音化されて現れるとき

나뭇가지（木の枝）　[namut>k'aji] < namu + kaji

나룻배（渡し舟）　[narut>pε] < naru + pε

（2）後部要素の初声がㄴ[n]、ㅁ[m]であり、その前でㄴ[n]音が現れるとき

멧나물（山菜）[mennamul] < me + namul

(3) 後部要素の初声がㄴ[n]、ㅁ[m]であり、その前でㄴ[n]音が現れるとき

멧나물（山菜）[mennamul] < me + namul

빗물（雨水）[pinmul] < pi + mul

(4) 後部要素の初声が母音であり、その前でㄴㄴ[nn]音が現れるとき

깻잎（ごまの葉）[k'εnnip] < k'ε + ip

베갯잇〈枕カバー〉[pegennit] < pege + it

参考文献

姜信沆　(1993)『訓民正音研究』成均館大学校出版部

高永根　(1997)『標準中世国語文法論』　集文堂

金武林　(1992)『国語音韻論』翰信文化社

金思華 (1981)『古代朝鮮語と日本語』六興出版

金昌燮 (1996)『国語の単語形成と単語構造の研究』太学社

朴トングン (2000) 語頭に現れる理由なき硬音化現象研究　『言語学』27, 韓国言語学会

安秉禧 (1968)「中世国語の属格語尾‘ㅅ’について」、李崇寧博士正頌壽記念論叢

安秉禧・李熙昇 共著 (1998)『한글맞춤법講義：ハングル正書法講義』新丘文化社

呉貞蘭 (1993)『現代国語音韻論』　蛍雪出版社

李秉根 (1979)『音韻現象における制約』塔出版社講義

李基文 (1972)『国語史概説』民衆書館

(1972)「十五世紀表記法の一考察」〈言語学〉3　pp201－209

李康勳 (1976) 国語の複合語及び漢字語内部で起る硬音化現象　ソウル女子大学論文集 第5号 pp161－195

李熙昇 (1955)『国語学概説』民衆書館

林洪彬（1998）『国語文法の深層』太学社
崔賢培（1959）『우리말본』正音社
許 雄　（1965）『国語音韻学』正音社

天沼寧・大坪一夫・水谷修 共著（1993）『日本語音声学』くろしお出版
窪薗晴夫・大田聡（1998）『音韻構造とアクセント』研究社
窪薗晴夫（1999）『日本語の音声』岩波書店
小松英雄（1981）『日本語の音韻』中央公論社
佐藤大和（1989）「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代（編）『日本語の音声・音韻（上）』pp233－265　明治書院
築島裕（1964）『国語学』東京大学出版会
原口庄輔（2000　a）新「連濁」論の試み「先端的言語理論の構築とその多角的な実証（4－B）－ヒトの言語を組み立て演算する能力を語　彙の意味概念から探る－」pp 715－732
Chung, Kook(1980)「Neutralization in Korean:A Functional View」ph.D.dissertation. University of Texas at Austin. pp 25－68
Cook, Eung-Do (1991)「Rendaku」(Japanese) and Sai-sios(Korean):Are the Similarities Fortuitous and Spurious? University of Calgary
Ins. Kuno. et. a l. eds.Harvard Studies in Korean Lingusitics Ⅳ. pp 3－12
Otsu, Yukio(1980) 「Some Aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems」
Yukio and Ann Farmer(ets.)MIT Working Papers in Linguistics :TheoreticalIssues in Japanese, Linguistics. 2 pp 207-227
Vance, Timothy J. (1987) An Introduction to Japanese Phonlogy. State University of New York Press, Albany

（参考辞書類、その他）
『国語大辞典』（李熙昇 1996）　民衆書林
『マスター国語辞典』（金賢植 1988）　東亜出版社
『韓国語発音辞典』　李ジュヘン・李ギュハン・金サンジュン共著（1998）地球文化社
『朝鮮語大辞典』大阪外国語大学朝鮮語研究室　編　角川書店
『国語（韓国語）』大辞典　第３版　李熙昇編著　民衆書林
『日本語アクセント辞典』　第２刷版　秋永一枝　編著　三省堂
『日本国語大辞典』第２版　小学館国語辞典編集部　小学館

『日本語大辞典』(1992) 講談社

『国語辞典』(1994) 岩波書店